

# 地元の名士も続々と支援 チャリティー音楽会や千枚画会

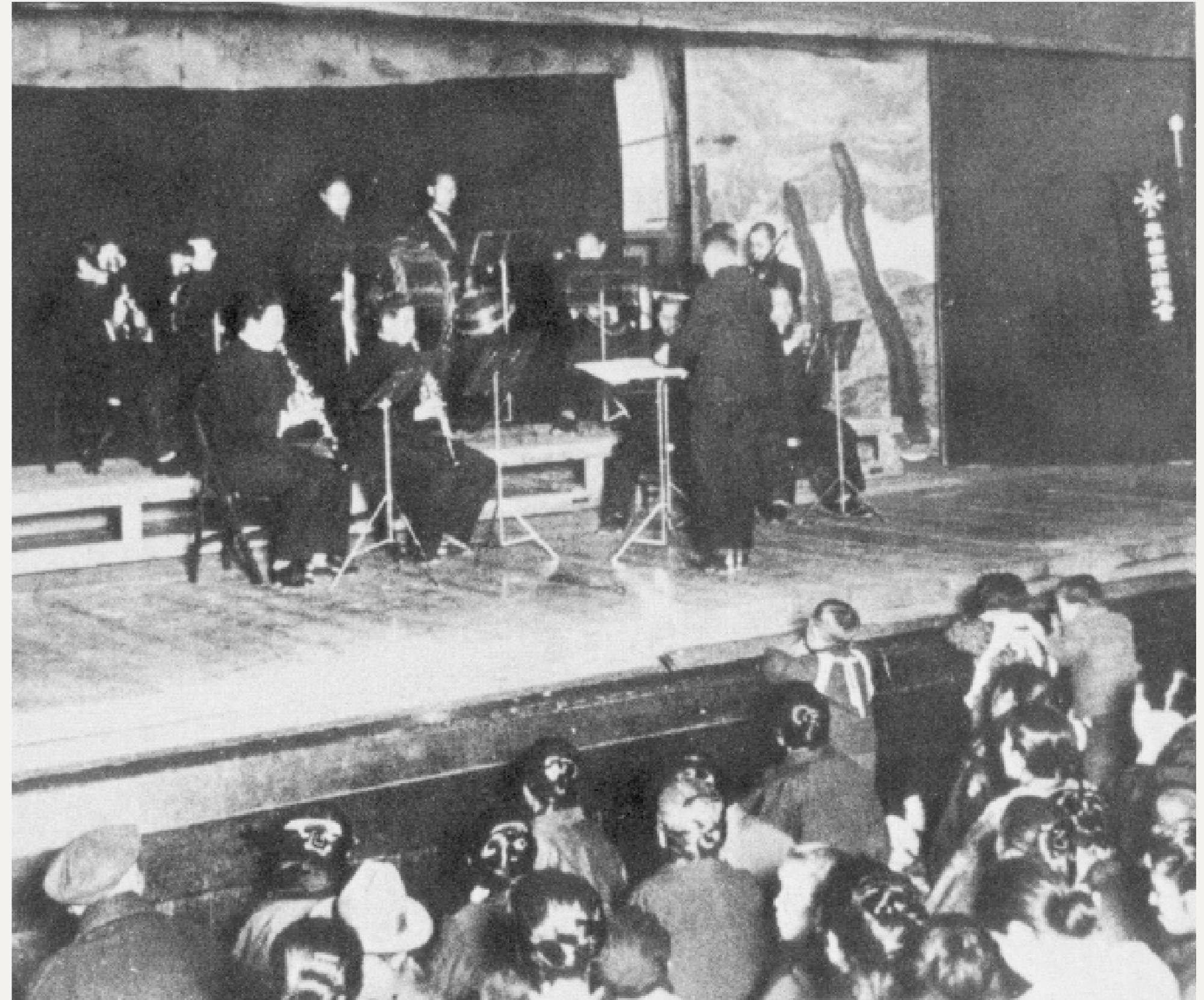
日本を代表する南画家 山本梅莊一門

さすが芸術家  
ユニーク企画で救済所を支援

「亀三郎の慈善事業は立派だ。吾々も応援できないか」  
梅莊が息子で門人の石叟と香雲に言いました。

そこで二人が企画したのが慈善音楽会。二人の趣味は音楽で「半田楽友会」というグループの長です。そのグループに当時流行のプロの義太夫などを加えての公演でした。

会場の光院には人垣が二重、三重。公演は大成功。



石叟、香雲が組織した半田楽友会の演奏風景  
(写真は本文より後年のもの)

## 千枚画会も大成功

さらに梅莊一門は大勢の弟子を合宿させ、先生の画を臨写させる。それを一人、千枚描かせた。その数万枚の画を希望者に頒布、飛ぶように売れたのです。

その売上は約7千円。絹本代などの経費が約4千円。残りの約3千円は、新築中の半田小学校へ2千5百円、榎原救済所に5百円を寄付。地元の子ども会にも百円を寄付して

います(金額の一万倍が現代感覚でしょうか)。

救済所に来た5百円の寄付は、みすばらしかった建物の改修にあてられ、少しは見られるものになったのです。

千人近い音楽会の入場者、千枚画会の画を買ってくれた数千人の人。そんな多くの人に救済事業を知らしめてくれた梅莊一門の功績は金額を大きく上回るものです。

## 救済所の人たちも働く

救済所で暮らす人たちも他人の援助を待っているばかりではありません。働く身体の人は子どもだって働きに出ています。下の写真は板山の晒し会社の作業風景。



成岩の山に真っ白な花が咲いて揺れているよう。それが全て晒した木綿。一枚一枚手作業で過酷な労働です。ここに救済所の若者が多くいました。

救済所に遺された石臼。數十台もありました。すり切れで廃品になった物でしょうが、紀念碑の土台に使われ現在も遺っています。



働きに出られない人は内職です。上の写真は製粉の粉挽きの石臼。救済所の作業場では老人や身障者も懸命に石臼を回します。

◎当時、ビールは藁で包んで保護して運びました。その藁製品を「スレアミ」といいます。カブトビールのスレアミは救済所の大重要な内職仕事でした。